

収益性を分析する

Q. 収益性分析の意味と改善方法は？

要旨 収益性分析を行うことによって、利益について、金額の多寡だけでなく、売上高や資本とのバランスを検証し、稼ぎ方の巧拙が確認できます。ただし、指標が良くても実態が伴わない場合もあるため、注意が必要です。

解説

1. 収益性分析からわかること

収益性分析を行うことにより、売上高に対する利益の割合、投資に対する利益のバランスが確認できます。この分析における利益は、売上総利益、営業利益、経常利益など各段階における利益であり、それぞれの利益との比較により分析します。

薄利多売で経営を行っているのか、高付加価値を求めて経営を行っているのかによっても指標の数値が変わってきます。企業のビジネスの特徴や経営戦略が数値に反映されます。

2. 収益性を分析する

①売上高と利益のバランス

一般的に「売上高－経費＝利益」で表わされます。この指標のもとになっている利益は売上から各段階における経費を差し引いた差額です。そのため、売上高に対する各利益の割合に課題がある場合には、売上高を増加させるか、経費を削減するしかありません。不必要な経費を洗い出し削減することや、売上高増加策を講じることは常套手段です。ただし、売上高増加策を講じた場合には売上高の増加率以上に経費の増加率を増やさないように留意しなければなりません。

また、売上総利益率が高い企業では、高

い利益率を維持するために、広告宣伝費や販売管理などの販売費が大きくなる傾向があり、売上高総利益率に比し売上高営業利益率が低くなることがあります。このように一つの指標だけに着目せず、自社の経営戦略を考慮して、さまざまな観点から分析する必要があります。

②資本と利益のバランス

資本に対しての利益のバランスが崩れている場合には、資産が過大になっていれば、使用しない資産の売却を検討するのも手段の一つです。

自己資本当期純利益率は自己資本に対する利益率であるため、借入により企業規模を拡大して経営を行っている場合には、自己資本当期純利益率は高くなる反面、業績が良くないときには返済額や支払利息が企業規模に比べて過大となり、負担が増加するリスクが発生してしまいます。指標だけでなく、企業のビジネスの特徴や経営戦略理解し分析することが必要です。

収益性は売上高や資本と利益との比率で検証する

＜ご提案のポイント＞

- ・利益の額ではなく、それぞれの利益と売上高や資本との比率で分析を行います。
- ・収益性分析を行うことで自社の稼ぐ力の巧拙を分析することができます。
- ・利益の獲得は企業経営において要であり、収益性の分析は財務分析の5つの分類の中でも特に重要な項目です。

1. 収益性とは

投下した資本や獲得した売上に対し、どのくらいの利益を残せているかの効率を確認する指標です。資本と利益、売上と利益の組み合わせにより、さまざまな指標があります。

2. 収益性分析の方法

①売上高と利益の比較

損益計算書の各利益項目と売上高との割合を分析します。売上高が10,000千円で売上高総利益が4,000千円の場合と、売上高が200,000千円で売上高総利益が60,000千円の場合には、規模が異なるため金額の大小で比較せず、売上高に対する比率を用いることで、比較検討することができるようになります。

売上高総利益率（％）	$\frac{\text{売上高総利益}}{\text{売上高}} \times 100$
売上高営業利益率（％）	$\frac{\text{営業利益}}{\text{売上高}} \times 100$
売上高経常利益率（％）	$\frac{\text{経常利益}}{\text{売上高}} \times 100$
売上高販管費率（％）	$\frac{\text{販管費}}{\text{売上高}} \times 100$

②資本と利益の比較

企業全体の経営資源である総資本や株主が拠出した自己資本に対する利益の獲得割合を分析します。ROAやROEは財務分析を行う上で最も活用される指標の一つでそれぞれの観点から、投資に対するリターンを検証します。

総資本利益率（％）（ROA）	$\frac{\text{経常利益}}{\text{総資本}} \times 100$
自己資本当期純利益率（％）（ROE）	$\frac{\text{当期純利益率}}{\text{自己資本（株主総資本）}} \times 100$